

在的裏を包巻くつつも明徳に意識化しなかつたが故に「夢内では行はずなれ」といふ
無原則的な政治性に依拠してこまゝ、無媒介的に街頭斗争へ入らざるを得ないことになり、六
三編がこれに之つる兵斗は単なる積上げに終焉してしまつた。「影の編集会議」による
編集権を完全に二極分解して立す明徳化させた。それは10月に交り「学会編集権」
を以て、及ド派の暴行―乱暴持ち出しとして現出した。こゝからなら、われわれが、敵
をへんぞの奪取の状況にあるため、より新聞学会の民主性（定款―編集権、自治
権）の幻想に依拠し、その当初から「10月決戦」を指定しつつも、自らを敗北過程へく
くこめていった。合法的斗いは権力のふには無力なこゝななつた。理事会・評議会が
右派として視をつつも自らの正当性に知りななることになり、権力構造そのものを暴
露する方向性を回避し「民主的解決」を政治的とはいへ計つたわれわれは斗いはまことに主
的標準に過ぎなかつたのである。ここに於いて、われわれを総括するわれはならなつた
ことは、敵はまさになれわれ自身そのものであることに他ならなつた。自らの意識性、
存任性を捉えることなしに正義の斗いとして指定してこまつたことは、10・8―10・11
連合総会（交渉）におけるあの松岡教授の「バラリスムのみ完全に敗北する結果とな
つた。松岡理事に代表されるあのバラリスムを完全に近代合理主義に包摂されることは
この間の採算介入回文に明らかである。われわれにわれわれはならなつたことは
明大新聞へ編集権、自治権を如何に奪還するのみに幻想を如何に解体し、自らを如何
なる方向性に主体形成するなである。たのである。

「明大新聞学会」の現出

こうしたわれわれの幻想性に依拠した斗いは10・2、10・10分レメルクマールに崩壊し、評
議会、理事会が権力を具体的に侵襲することになり、新たな斗いに大生部分が一
つにこゝになり、自らの斗いの内容を向う攻撃となつていった。それはまことにあの駐
無しの場外である。10・2、10・10分以降、理事会、評議会は再刊をもつて改訂変
化し、急速に再編を進めた。これに於て、立ち遅れつつも、新聞学会斗いは一定程度大衆
となり、それを実力斗いとして総括した。理事会評議会への実力介入―回文を致し
再刊即時停止をなら取り、大衆団をならに後でいった。10・5月に渡り大衆団文は有利
に展開しつつも、理事会が自らの犯罪性を暴露されていくことになり、此をさのこ
引き延ばしをもつて斗いの圧殺を計つてきた。

2、10・10分攻撃の本意は、10・11系による自らの利害の追求―マルシヨリ性としての明
大新聞の私物化、権威（公正、中立）を媒介とし、明大新聞を独占化するこゝになり、
名誉と政治的利害の道具とし、また同時に小生本ではあるが資本性の追求の二者に於
て、マルシヨリイデオロギー―大衆マルシヨリイデオロギ―をまことに明大マルシヨリ新であつたのであ

る。どうした犯罪的明大新聞の存在をあの69年明大3巻において許容してきたことは、批判的に総括(な)りればならぬのではないな。「利用する」といつつ、結局はそのメス、イヤダのもの全体性において含括されていくことをわれわれはメスコミを視るならば、容易に理解できるであろう。どうしたの、B一派の攻撃と共に、より以上にのB一派と一体化した大勢自身にあっては、69年の、9以降、それ以前に準備された対策本部と内閣番、はなをもち、学内権力を集中化し、ロックアウト体制によって、学内秩序化を遂げる一環として「メス、10処分」が位置していたことをおなぬばならない。

日常的生活空間である夜政に、より矛首を内包し、また、それ故に、大学における「メス」の軌道となってきた際、そして学館は集中的に大学権力の散逸した攻撃を受け、口家権力に比べても重要な再編の環として存在していった。その意味で大学権力にとって、学館は重要な環であった。そして、学新もまた、ヌルジョウ式によってさえ「言論、報道」の自由という形において保障されているが故に容易に攻撃さえぬ重要な環として存在していったのである。そのことは日大新聞等を見れば明らかで、現代でも、全共3連下の崩壊以降、幾多々大学において学新に対する攻撃があらゆる形でなけられていく。

今まで明大においては、明大新聞をヌルジョウイデオロギーによってたつ、B一派の自主規制路線の中で大学権力は目らの手を巧むことなく掌握できていたのである。まさにこの關係は口家とメスコミ資本と大学と明大新聞の關係そのものである。

69年10月以降、物理的形態をもつて現出せざるを得なかった大学権力の秩序化、正常化路線はその物理性を補充するものとして「メス、10処分」攻撃が最も重要である。明大新聞への攻撃は支配管理体制の再編強化の環として重要な位置を占めていた。それは6月なら発せられた「学内だまり」に象徴的に示されている。

「明大新聞学会」の分化、発展」

「メス、10処分」白紙撤回(処分紛碎)というスローガンにおいて示された新聞学会3巻は「メス、10処分」白紙撤回(処分紛碎)というスローガンにおいて示された新聞学会3巻は新聞学会の相違(編集権、営業の分離、権力相違、非他相違)を支えるものではありえなかった。どうした批判的総括なら「メス、10処分」白紙撤回とは理事会訴訟会解体は成術的出点でかなり得ず、3巻主体そのものの内容性を向うものとなり得ず、結集する諸砂鉄、諸サークル、諸個人の適合性をも向うことなく相違わらず「正当性」の論議の3巻でこなされた。2、10処分を媒介に再度、内在化していったメスコミとして、自らを曲げ、3巻主体へは登場させたそのことは、学生連「学新連」の二元的存在性としてあった。学新連は空襲する内在性を有していた。それは同時に学生連「編集者」存在の二元的

存在を破壊するものであった。だからこのことを真に向われるのは新聞学会を争うことでの勝利したに解である。

理事の逃て、引き延ばし策に反対し、われわれは理事者の存在一教授存在の二面的存在そのものを向う中から攻撃への実力介入一大衆団交のより突出した三つとして展開していった。こうした突出した三つは展開しつつも、また、その論議そのものは理事一教授の道義性を向うものとしてこの展開しえない、本質的に大衆の支配、管理体制は日常的な風、時局、教室授業に根柢的に存在していることを視えつつも開放に射程に入れることはできなかった。こうしたわれわれの実力争いは、より大衆的拡がりを持ち、勝利時状況を立ち取った。く、この団交の圧倒的勝利は現在、餘りにではあるが、実効されてきている。

「新聞学会解体」の提起

編集権、自治権などさまざま、運営権そのものをも心なち取った大新聞記者は全面的勝利として終焉せんとしている。だから大新聞記者の終焉はあっても、大新聞記者の終焉はない。さらなる大新聞記者を宣言しなければならぬ。

まず初めに新聞学会解体の内実は自らの意識解体であり存在の解体である。意識・存在の解体は認識と実践の泡えがる相対性・連関性を媒介してなされ主体形成の問題として構定される。

次に新聞学会を争うに於て主要に語られてきたところの関係性の解体である。それは新聞学会を争うに拮抗した諸戦線、諸サークル、諸個人が一つの具体性を媒介として拮抗しつつも、諸々の個別性の相互批判と共有性→共同性獲得という関係性の獲得であるだろう。つまり、学新(メディア)に於ける編集者(書き手)と読者(読み手)の関係は、定立した関係として存在し、それが如何に革命的な学新(メディア)であろうと代行的主義の貫徹、これ、向題性、責任性は全て編集者の主体へと収斂されていった。そうして在り方そのものが独自と疎外現象を生産するということも確認する必要があるだろう。

運動(読み手)——表現(メディア)(書き手)——運動(読み手)

これまでの学新(メディア)の在り様を図式化するならば、以上の関係でありわれわれが提起する読み手・書き手の関係性の解体というのはこのカッコの中に入りの中に書き手が入り読み手が入りそれらはまさに相互性、共同性の問題としてあるだろう。

ここに於て我々が編集主体としても斗争主体としても登場する、存在する必然的結果である。このことは教壇の提起する教育一被教育、あるいは学新運動の過程で提起された管理一被管理の問題でもある。こうした関係性を保障するものとしてわれわれは拡大マップを共闘を位置付けたのである。拡大マップ共闘は革命的表现運動であり、革命的な文化創造

の時間的、空間的なものである。しかしながら革命的表現運動あるいは革命的文化創造は、それのみに於て深化・発展するものではない。得ず領域として存在し得る筈もない。その保障するものは具体的運動を媒介とする他はないであろう。

「拡大マップの止揚、発展に向けて」

以上のことを踏まえるならば現在の如くわれわれは、具体的に何を媒介として運動を展開してゆくのか。

われわれは基本的に、現在の自らの存在領域における教育の帝国主義的再編、支配、管理体制の再編強化に對してどのように闘いを構築し、同時に神髓・三田塚斗争の（普遍）的變を自覚しつつ闘いを展開していかねばならない。

大卒の帝國主義的再編は、中教習各中をメルクマールに大学立法を媒介とし明治においては対策本部、改進黨黨を頂点として支配管理体制の再編強化を着々進行している。そのことは恒常的ロックアウト体制（夜間ロックアウト）をもって現出し、学館のロックアウトに表徴的に行われている。そしてさらに大卒権力は今秋学費値上げをもってより一歩の支配、管理体制の再編強化をもって、帝國主義的再編強化をもって帝國主義的再編を遂げせよとしている。

学館解放斗争はまさに支配、管理体制解体の突破口であり、新聞学費斗争の同盟性としてある。より以上に神世学館が大学権力の独自攻撃としてあるのみではなく、国家権力による明確な大卒の個別的分断であり、神田地区治安体制として位置付けられていること、視るならば、神田学館解放はそのまま神田地区治安体制粉砕の斗いとして必然性を有している。それは国家権力との直接的な対峙を迫られるものとして「暴力性」が向われるであろう。

同時に、現在既に暴力解放された現在、学館の自主管理の露徹とその内容が向われまい。未だして学館の自主管理そのものは、自己目的化されるものではなく、自主管理を媒介として分断と管理を粉砕する中から、その内容は再編が日常的、根底的に存在している授業—教習を射程に入れる中から支配、管理体制を具体的に解体していかなくてはならない。その斗争の萌芽は教習の展開している教職斗争に優れて存在している。

われわれにとって授業料値上げ阻止斗争は、大きな課題ではありつつも、そこに至って集約されていくものではない。より根源的に支配、管理体制の解体として多様な闘いを展開していかねばならない。そのことは同時に自らの主体をどのように変革していくのかの問題として存在しているのである。

こうしたことは個別斗争と一方に於ける政治斗争そのものの相互連関性をみつめる中、

また、三里塚の農民、沖縄の人民、在日中朝人民、被差別部落人民を逐照射する中から絶えざる自己変革をなし、強固な戦線を構築していかねばならない。

いま、まうにわれわれマツコ共闘は編集主体——斗争主体の二元性を突破し、自らを編集主体であると同時に斗争主体として止揚しつつ同時に、読み手——書き手の関係性の変革を通じてメディアを如何に構築していくかとして向わっている。表現を媒介として結合するか、斗争を媒介として結合するかの二者択一の問題としてあるのではなく、^{主体的}手袋にそれが相互連関的に存在し、革命のメディア、メディアを同時的に追求していかなくてはならない。